
つよわ虫

小野豆八七灰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つよわ虫

【Nコード】

N5540BA

【作者名】

小野豆八七灰

【あらすじ】

マザコン少年と生まれつき右腕が無い少女の「いじめ」に関する物語です。

ちよっとだけ実話をもとにしています。

処女作です。テスト感覚で登校しました。

馴れてません。少しずつ頑張っていきたいです。

プロローグ

彼女に会えた事は、僕にとって何より幸福だった。

本当なら思いたしたくもないような記憶も、そこにその時に彼女が居ただけで、青春時代がキラキラ輝く思い出に変わる。

そう、僕は学生時代いじめられっ子だった。

弱い子供だったのだ。

運動も、勉強も、見た目もぱつとしない…ぱつとしないだけで何処にでもいそうな少年だった僕がいじめられた理由。

それは僕が弱い子供だったからに違いない。

強くなる方法なんて思い付かなかった。

ただ虐げられ、傷つき、磨耗していくだけの日々。

それが当たり前の日常、そんな弱い子供だった。

そして彼女は、…多分僕よりも弱く脆かった。

…なんとなく想像が付いた人、大正解。

そう、僕と彼女は徒党を組んだ。

弱いもの同士寄り添いあって、強くなろうとした。

別に恋人になったわけじゃなく、強くなれるように協力をしたただけだけれど。

結果として彼女は、強くなった。

僕を置いて強くなった。

そこに僕は必要無かった。

徒党など組まなくとも、彼女は、一人の力で成長出来る人間だったのだ。

格好よくて、眩しくて、羨ましくて、僕が今まで見た事のない種類の強さを持った彼女を見て、

嫉みでなく、純粹に心から、僕も彼女のように強くなりたいと思っただ。

僕は結局強くはなれなかった。けれども一つだけ、決心をした。

そう、なれたら僕は強くなったと言える姿を思い浮かべ、それに向かって頑張ろうと決めた。

…あれから10年たった。

物凄く昔の事に感じるけど、思い返してみるとあっという間にも感じる。

実は今日、10年の努力の結果が出る。

僕が強くなれるか強くなれないかは今日決まる。

緊張してないといえは嘘になる。

だけど同じくらい興奮してる。

結果は、全て彼女が握ってる。

もうすぐ彼女は僕のところに来てくれる。

待ち合わせの時間はもうすぐだ。

それまで、自分の気持ちを落ち着けるために、自分の覚悟を確固たるものにするために、あの日の彼女を思い返してみようと思う。

僕にとって彼女は、勇気や希望や、そういった暖かなものの象徴だから。

それは世界で一番“強い弱虫”の話。

転校

高校2年生の春、親の仕事の都合で、東京から愛知の片田舎へと引っ越す事になった。

車の窓を開けて愛知の町並みを眺めてみると、東京に比べ背の高いビルが無く、道を歩いている人の数が少ないかった。

だけど車やバイクはたくさん走り回っていて、なんだか人よりも車の数の方が多いように感じられた。

「宙ー！風のせいで髪が！運転しづらいわ！」
窓を開けていたら運転していたお母さんに怒られてしまった。
横を見ると母さんの髪が右に左に上に下に、大暴れしている。

これじゃ前が見えなくて事故を起こしてしまうと、大慌てで窓を閉めた。

「ごめんごめん。」
素直に謝ると、母さんは全く…と言いながら笑った。
怒ってはいないようだ。

“宇宙”の“宙”と書いて“ソラ”、それが僕の名前。
僕はこの名前が気に入っている。
なんだか壮大で凄いもののように感じるし、
それにこの名前は母さんが、「鳥に愛される空のように、人に愛される“ソラ”になるように」と付けてくれたものだ。
優しくて暖かかない名前だと思う。

母さんは早くに父さんを無くし、女手1つで僕を育ててくれた。子供の頃は夜1人で仕事の母を待つのが寂しいと感じる事もあったけど、僕を育てる為にいっぱい苦労してきたところを見てきたから、今では心から感謝してるし、誰よりも尊敬してる。

おかげで思春期まっさかりで、クラスメイトが反抗期を迎えてるような時期に、面と向かって「お母さん、いつもありがとう」と言えてしまうくらい母とは仲がよかった。

その事で友人にはマザコンとからかわれた事もあったけど、何も恥ずかしくないと思っていた。

「母さん、新しい家にはあとのくらいで着くの?」「あと多分5分もしないで着くわよ。あそこに学校が見えるでしょう?新しい家は学校からそんな離れてなかったはずだから…あ、ちなみに、あの学校が宙が通う事になるところだからね」

母さんは片手で華麗にハンドルを動かしながら、少し離れたところに見える学校を指差した。

「あれがかあ…なんだか小さいね。離れてるからかな?」

「一々東京と比べるなんて性格悪い話だと思っけど、なんだか色々違いすぎて、思わず一々驚いてしまう。」

「違うわよ。人数の少ない学校だから小さいだけですよ。」

「人数少ないの?」

「多くはないわね。」

「ふうん」

母さんも具体的な人数までは知らないらしい。

多くはない、っていうのがどのくらいなのか想像付かないまま、僕

の乗った車は学校を通り越していった。

体の角度を工夫しながら、学校が見えなくなるまで見つめ続けていると、母が心配そうに聞いてきた。

「新しい学校はどう？楽しみ？不安？」

「うん…どっちかかっていうと楽しみ！友達が増えるの嬉しいし。

勉強だけ心配だけど。僕頭悪いから」

ふざけて言うと、軽く頭をこづかれた。

「自分で頭悪いか言わないでよ。勉強は、頑張ってね。」

そういつて笑った。

僕も笑った。

母さんの顔は、もう不安そうじゃなかった。

母さんは、転校が決まってから、僕の心配をよくするようになった。

それが僕には不思議だった。

僕にとって、転校はなんだか大掛かりなクラス替えみたいな感覚だった。

だって前の学校の友人と友人じゃなくなるわけじゃないし。

知らない人だらけのクラスに入ることになるだけなら、クラス替えと一緒にないかと考えたからだ。

そう、考えて、いたんだ。

「学校楽しみだなあ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5540ba/>

つよわ虫

2012年1月15日02時46分発行